2024

慶應義塾

サステナビリティレポート

Keio University
Tokyo, Japan

慶應義塾は持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。

福澤諭吉筆「慶應義塾の目的」（1896〔明治29〕年）

Keio University

はじめに

「人身の安楽」と「人心の高尚」とを求める学塾

― サステナブルな社会を目指す ―

「文明とは人の身を安楽にして心を高尚にするを云うなり」―慶應義塾の創立者、福澤諭吉が、その著『文明論之概略』においてこのように「文明」を定義づけた時、彼の眼には確かに19世紀末の西洋で著しく進捗する機械の発明と技術革新が映っていました。「蒸汽船車、電信、郵便、印刷」の4つの発明が、西洋における歴史の原動力として人心を一新してきたことを看破した福澤はその限りで、それらの文明の利器の日本への熱心な導入者であったのです。

しかし、福澤はまた、技術や制度は文明の外形や有様に過ぎず、そこに人の心身における「安楽」と「品位」の進歩が伴って初めて文明の世が到来すると述べました。そして、この安楽と品位とは、智（Intellect）と徳（Moral）によって与えられるものであり、文明とは、とどのつまり智・徳の進歩である、と彼は断言します。ただし、人類社会は未だその段階に達していないとする福澤にとって、文明とは常に到達するその先の目標であり理想であったことに注意するべきです。

戦争による世界情勢の混沌、気候変動による災害の増加など、今、世界はめまぐるしく変転しています。サステナブルな社会を目指すためには、変化を柔軟に受け止め、課題を解決するための智と徳の拡充も常に求められています。

かつて「人身の安楽」と「人心の高尚」を目指した福澤が、その門下生に対し、「気品の泉源、智徳の模範」たらんことを求めた学塾の理念と伝統とが、今も変わらず慶應義塾の道標となっているのです。

福澤諭吉

目次

1 はじめに | 2 SDG Initiatives at Keio University | 3 塾長メッセージ | 4 Policy（ポリシー） | 5 Environment（環境・資源保護） | 9 DEI（協生環境） | 13 Health&Well-being（健康・福祉） | 15 Student Conference（塾生会議） | 18 Keio SDGs News

SDG Initiatives at Keio University

慶應義塾がSDGsへの取り組みで目指すこと

慶應義塾は、創立者福澤諭吉の「実学の精神※1」を基盤とし、総合大学としての強みである分野横断的アプローチにより、教育・研究・医療を通じた社会へのさらなる貢献を目指しています。

※1 実証的に真理を解明し問題を解決していく科学的な姿勢が、義塾伝統の「実学の精神」です。

慶應SDGsロゴ

Keio University
Tokyo, Japan

慶應義塾は持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。

学内において必要な取り組み、今後力を入れるべきことは何かを検証するPDCAサイクルの一環としたいと考えています。また、本報告書を通して、慶應義塾のサステナビリティを目指す取り組みへの理解、協力を得ながら、様々な連携を試み、一朝一夕には解決し得ない地球全体の課題について、取り組んでいきたいと考えています。

中期計画2022-2026

慶應義塾におけるSDGs

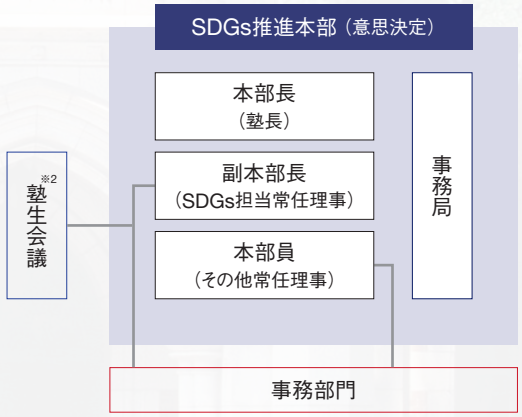
持続可能な開発目標（SDGs: Sustainable Development Goals）とは、2015年9月の国連サミットで採択された17の国際目標（ゴール）です。2030年までに、発展途上国と先進国双方が持続可能でよりよい世界を目指すための普遍的な目標で、「地球上の誰一人取り残さない」を理念として掲げ、貧困、不平等、気候変動、環境問題、平和と繁栄、正義などに関する17の目標と、169のターゲットから構成されています。慶應義塾も、大学病院を有する教育・研究機関として、世界と地域社会に貢献する研究大学として、SDGsに関連する様々な取り組みを行っています。

サステナブルな社会を目指す事業計画

慶應義塾は中期計画2022-2026において、中期的視点を持って実行していくべき重要な項目を取り上げています。そこにはSDGsの目標とする理念とも通底した、環境計画、ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン（DEI）などの実践と慶應義塾における一層の定着を目標とした計画も掲げられています。中期計画を基にして作成された年次計画のうち、サステナビリティを目指す活動に特化した項目をまとめた年次報告書が「慶應義塾サステナビリティレポート」です。

本報告書に示される成果や進捗により、サステナビリティに関わる事業計画の進捗を数値的・定性的に見える化し、

慶應義塾のSDGs推進体制



※2 塾生とは、慶應義塾で学ぶ在学生のことを示します。

持続可能な社会の実現を目指して

塾長
伊藤 公平

慶應義塾は、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標SDGsに向けて、さらには2030年より先のBeyond SDGsを見据えて取り組んでいます。

本学らしい取り組みとしてまず挙げられるのは、学生の声を慶應義塾のSDGsの施策につなげる塾生会議の活動です。塾生会議は、大学生にとって身近な問題から世界の課題まで、専門家や教職員、一貫教育校の児童・生徒等、幅広い年齢層や異なったバックグラウンドを持つ人々の中で話し合いながら、自分たちに何ができるかを考え、実現につなげることを目的としています。3年目を迎えた2024年度は活動の幅も広がり、前年度から継続したプロジェクトに加え、サステナブル・シーフードへの興味関心を促すことを目的とした「サスシープロジェクト」、プラスチックごみの削減を目的とした「コンタクトケース回収プロジェクト」など数々の新たなプロジェクトが始動しました。一部のプロジェクトについては、2025年度以降も慶應義塾全体の取り組みとして継続することが決まっています。

また、環境問題への対応も、慶應義塾全体のカーボンニュートラルに向けたモデルキャンパスと位置付けている湘南藤沢キャンパス（SFC）を中心に進めています。これまでの自然環境・生物多様性の保全およびサステナブルな地域づくり・キャンパスづくりの取り組みが評価され、SFCは環境省の2024年度後期「自然共生サイト」に認定されました。さらなるCO_2排出量削減を進めるため、SFCにおける太陽光発電設備のエネルギーサービスの実施に関する基本合意書を、東京電力エナジーパートナー株式会社および日本ファシリティ・ソリューション株式会社と締結しました。国内において、広大な敷地内に建物が点在する学校施設の屋上に大容量の太陽光発電設備を設置する事例はほとんどなく、また、単なる設備設置に留まらず、余剰電力発生時の環境価値の有効活用やSFCで使用する電力の全量再生可能エネルギー化などを合わせて検討することは、学校施設におけるカーボンニュートラルの先進的な取り組みといえます。

協生環境の整備においては、誰もが活躍できる環境づくりを一層進めるため、これまで実施してきた各プロジェクト（「CARE（Consultation, Assistance, and Resources for Employees; 悩みと仕事の両立支援プログラム）」、「Breezeプロジェクト（女性のからだ支援プログラム）」、「KIDS（Keio Infant Daycare Support; 育児支援プログラム）」および「@easeプロジェクト（障害学生支援）」等）をより深化させています。2024年度は、授乳・搾乳・女性休憩室の日吉キャンパスへの設置や、障害のある学生が時間や場所に制約されることなく申請手続きができるように、在学生向けポータルサイト「K-Support」からの「合理的配慮」のオンライン申請を可能にしました。

さらに、学内の様々な部門が開催するワークショップ、シンポジウム、市民講座、公開講座において、ウェルビーイングに関する講演や議論を積極的に行うほか、「慶應義塾大学日吉子ども食堂」や、本物の医療機器に触れる体験学習の開催などを通じて、子どもたちや地域との交流も深めています。

こうした活動を引き続き発展させ、今後も慶應義塾に関わるすべての人々と一緒に、身近な問題から世界の課題まで幅広く目を向けながら、意欲的に取り組んでいきたいと考えています。

Policy ポリシー

慶應義塾のサステナビリティ・ポリシー

慶應義塾ではサステナビリティを目指す取り組みを推進するため、
「慶應義塾協生環境推進憲章」、「慶應義塾環境理念」を掲げ、それらに基づいた各方針を定めています。
また、SDGsのゴール8「働きがいも経済成長も」への取り組みの一環として、採用ページに雇用に関する各方針を掲載しています。

慶應義塾 協生環境推進憲章

（2019年9月20日制定）

1 自他の尊厳に等しく敬意を払い、互いの人格を尊重し、協力し合う協生社会の実現を目指します。
2 多様な価値観への理解を深め、自分らしく生きることへの共感と配慮を育む啓発活動を推進します。
3 社会的障壁を取り除くことに努め、個々の選択に応じた生き方を実現できる環境を整備します。

男女共同参画基本理念
https://www.diversity.keio.ac.jp/wlb/philosophy.html

ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン（DEI）の推進に関する基本方針
https://www.diversity.keio.ac.jp/diversity/policy.html

障害※3のある学生の支援のための基本方針
https://www.diversity.keio.ac.jp/ease/policy.html

ハラスメントについて 慶應義塾の基本方針
https://harass-pco.keio.ac.jp/guideline.html

慶應義塾大学病院　多様な性を尊重するための基本方針
https://www.hosp.keio.ac.jp/about/policy/diversity/

一般選抜 受験および入学後の配慮について
https://www.keio.ac.jp/ja/admissions/special-provision/

慶應義塾大学理工学部・理工学研究科　Keio Diversity, Equity, and Inclusion Goals（KeiDGs）
https://dei.st.keio.ac.jp/about-keidgs/

慶應義塾 環境理念

（2012年7月6日策定）

慶應義塾は教育・研究・医療における活動において、地球環境の保全と持続可能な循環型社会の発展に貢献します。また、教職員、塾生のひとりひとりが、地球生態系の一員であることの自覚と責任を持って、環境改善活動を推進します。

慶應義塾研究倫理要綱
https://www.research.keio.ac.jp/forms/files/f02-01.pdf

雇用に関する方針

慶應義塾にとって「人」は何よりの財産です。慶應義塾で働く一人ひとりが豊かな人生を送り、それが持続可能であることを目指しています。そのために、職場環境の整備、健康と安全の確保、人材育成、能動的な働きを創出する人事制度や労働慣行に関する取り組みを実施しています。

慶應義塾職員採用情報　雇用におけるSDGsへの取り組みについて
https://www.hrm.keio.ac.jp/docs/153314.html

※3 慶應義塾では、「障害者権利条約」および「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」の趣旨にある、「障害は人ではなく社会の側にあり、その「社会的障壁」を取り除くことが、私達の責務である。」という考え方に立つ「社会モデル」を大切に考えています。そのため、「障害」は社会や環境の側にあるということをより意識する観点から「障害」の表記を用いていきます。

カーボンニュートラルの取り組み

慶應義塾全体のカーボンニュートラルに向けて

慶應義塾は2030年に電気使用量のすべてを自然エネルギーに転換することを目指します。

慶應義塾大学には6つのキャンパスがあり、大学病院や一貫教育校も含めると、それぞれのエネルギー使用量、使用形態、オンサイト太陽光発電のポテンシャルなどの条件は大きく異なっています。これらのキャンパスの特徴も勘案して、カーボンニュートラルに向けた具体的な検討を行っています。

▶2024年度に開始した取り組み

- 湘南藤沢キャンパス（SFC）における太陽光発電設備のエネルギーサービスの実施に関する基本合意書を締結

  2024年4月11日付けで、東京電力エナジーパートナー株式会社および日本ファシリティ・ソリューション株式会社（JFS）と湘南藤沢キャンパス（SFC）における太陽光発電設備のエネルギーサービスの実施に関する基本合意書を締結しました。JFSが提供するサービスを活用して、2024年度に詳細設計を行い、2025年度以降、太陽光発電設備（設備容量:約570kW見込み）をSFCに設置開始する予定です。詳細設計にあたり、蓄電池や電気自動車の急速充電器の設置についても検討し、太陽光発電のさらなる有効活用を図ります。本取り組みにより、SFCにおける年間使用電力量の約14%に相当する約65万kWh（一般家庭約200世帯分の年間使用電力量に相当）が再生可能エネルギー電力となり、年間で約278トンのCO_2排出量削減が期待できます。

＜将来的な取り組みイメージ＞

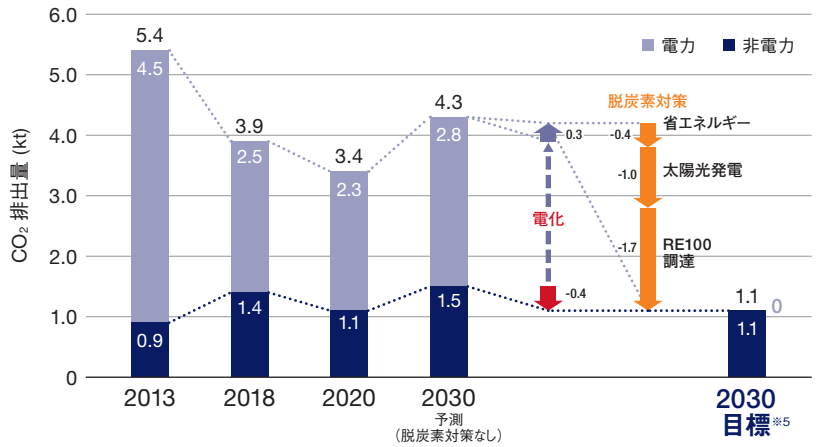
- 各家庭の太陽光発電で生み出された「環境価値」※4による慶應義塾のカーボンニュートラル支援を開始

  慶應義塾と東京電力ホールディングス株式会社は、慶應義塾の関係者（卒業生・教職員・学生および保護者など）の各家庭に新設または既設の太陽光発電設備から生み出された「環境価値」により、慶應義塾のカーボンニュートラルを支援していただく取り組みとして、「社中協力×カーボンニュートラル計画」を立ち上げました。この募集を2024年度より開始し、塾長をはじめ複数の支援が集まっています。

湘南藤沢キャンパス（SFC）におけるカーボンニュートラル

湘南藤沢キャンパス（SFC）では、慶應義塾全体のカーボンニュートラルに向けたモデルキャンパスとして、自然エネルギー電力への転換を実現するロードマップを作成しました。2030年を目標年として、照明器具のLED化、節電の徹底、建築物の省エネルギー性能の向上などによる省エネルギー、太陽光発電を中心とした再生可能エネルギーの導入、Renewable Energy 100%（RE100）電力の調達などによって電気使用量のすべてを自然エネルギーに転換します。キャンパスにおけるオンサイト太陽光発電のポテンシャル評価を行った結果、建物の屋上やカーポートの屋根などに太陽光パネルを設置することで、約30%のエネルギーを自給可能であることがわかりました。SFCでは、エネルギー自給率向上のため、地域バイオマス資源の発電利用のポテンシャル調査なども計画しています。また、カーボンニュートラルに関連する生物多様性や資源循環などの環境問題についても統合的に取り組んでいきます。

SFCのカーボンニュートラルへ向けたロードマップ



※4 電気や熱などエネルギーそのものの価値とは別に、地球温暖化への一因とされているCO_2の放出がない、という「付加価値」のことです。この環境価値を慶應義塾が取得することにより、その環境価値分のCO_2排出量を減量したことになり、省エネルギーなどのエネルギー削減の努力に加えて、慶應義塾のカーボンニュートラルを加速化することができます。

※5 脱炭素化対策は2023年3月時点で想定している内容であり、今後の検討に応じて変更される可能性があります。

環境・資源保護の取り組み

湘南藤沢キャンパス（SFC）が自然共生サイトに認定

慶應義塾は、環境省が発足した「生物多様性のための30by30アライアンス※6」（https://policies.env.go.jp/nature/biodiversity/30by30alliance/）に2023年5月より加盟しています。

2025年3月、湘南藤沢キャンパス（SFC）が、環境省の2024年度後期「自然共生サイト」に認定されました。「自然共生サイト」は、生物多様性の価値を有し、事業者、民間団体・個人、地方公共団体による様々な取り組みによって、生物多様性の保全が図られている区域を国が認定する、ネイチャーポジティブの実現に向けた取り組みの一つです。自然共生サイトに認定された区域は、国立公園などの法的に設定された保護地域以外で、生物多様性を効果的かつ長期的に保全する地域（OECM）として、国際データベースに登録されます。SFC自然共生サイトは、都市化が進む湘南藤沢地域において、豊かな自然環境が残り、生物多様性が高いエリアに位置しています。SFCでは、このエリアの自然環境・生物多様性の保全およびサステナブルな地域づくり・キャンパスづくりに向けて、教育・研究機関の場としての強みを活かし、最新の技術も取り入れた先進的な取り組みを積極的に実施してきました。今回の認定は、そうした自然環境・生物多様性の保全への取り組みにより、本地域に典型的な生態系や希少な生物が保全されていることなどが評価されたものです。

また、SFCの認定に先駆けて、慶應義塾保有の学校林（慶應の森）の一つである宮城県南三陸町の志津川山林も、南三陸FSC認証林の一部として2024年10月に2024年度前期「自然共生サイト」に認定されています。慶應義塾は、全国に所有山林や国有林分収契約山林を合わせ160ヘクタール超の山林を保有しており、志津川山林は慶應の森の全体の4割を占める64ヘクタールの面積を有する最大の学校林です。南三陸地方では、絶滅危惧種に指定されているイヌワシの生息環境再生プロジェクトが進められており、志津川山林もその対象地の一つとして貢献しています。

SFCサイト全体図

※6 「30by30アライアンス」とは、生物多様性の損失を食い止め、回復させる（ネイチャーポジティブ）というゴールに向け、2030年までに陸と海の30%以上を健全な生態系として効果的に保全しようとする目標です。

地球環境に優しい「紙で作ったアートフラワー胡蝶蘭」の生産・販売を開始

ー熊本地震をきっかけに誕生した女性活躍を支援するスーパーウーマンプロジェクトー

メディアデザイン研究科（KMD）の地域みらいプロジェクトとMICOHANA株式会社（https://micohana.jp/）は、経済産業省九州経済産業局デザイン経営ゼミを通じて2022年8月より事業化研究を続けていた、紙で作る「スーパーフラワー」を活用し、2024年度に「アートフラワー胡蝶蘭」を商品化しました。日本の折り紙の技術を活かし、高級紙を使った花を一つひとつ手作りで作り上げることで、品質が長期に変わらない地球環境に優しい贈り花を提供するプロジェクトです。リサイクル・リユースが可能な供給体制の構築により、生花の売れ残りや規格外品の廃棄問題を解決し、環境や社会に優しい循環を実現します。また、在宅の隙間時間を活用した生産を可能にすることで、子育て中の主婦など外出困難な方の就労機会創出にもつながります。普及啓発に向けて、この取り組みに賛同しプロジェクトに参画している株式会社キイストン（https://www.keys.ne.jp/）の飲食店のネットワークを活用し、開店お祝いなどでの活用を通じてさらなる改善と需要の拡大に向けた実証を開始しました。

「みなさんmiraiプロジェクト」講演会開催・慶應グッズ作成

「みなさんmiraiプロジェクト」は、「自然の中で考える生命、社会の未来―我々は何ができるのか」をテーマとして、キャンパスではできない学びを研究領域・キャンパス横断で行うプロジェクトです。

2024年5月13日、鈴木卓也氏（南三陸地域イヌワシ生息環境再生プロジェクト協議会会長兼南三陸ネイチャーセンター友の会理事）と一ノ瀬友博環境情報学部教授を招き、プロジェクトの舞台である慶應義塾の学校林志津川山林に焦点を当てたシンポジウムを開催しました。ドローンを使った撮影による森林の分析結果、そして、海と森が循環する「いのちめぐるまち」を目指す南三陸町で行われている、森を活かす取り組みについて話を伺いました。南三陸の森が、どのような森でどのようなポテンシャルを秘めているのか、理解を深める機会となりました。2024年12月9日には、齋藤暖生氏（東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林樹芸研究所長）を招き、「みんなの森の復権へ」と題した基調講演を三田キャンパスにて行いました。人々の森離れによって、生物多様性の喪失、災害リスクの増大、資源の過剰利用、モニタリングの減退といった、多くの弊害が誰にでも返ってくる危険性が示され、あるべき森との付き合い方についての提言をいただきました。

また、慶應義塾が関わる南三陸のFSC認証林の間伐材を使用したチャームを慶應グッズの試作品として作成しました。間伐材は森の循環を象徴するもので、「FSC認証マーク」をチャームの裏側につけることで、国際的な持続可能な取り組みの周知を図っています。

環境・資源保護の取り組み

佐賀県鳥栖市と脱炭素社会の実現に向けた相互連携協定を締結

2024年5月30日、メディアデザイン研究科（KMD）と佐賀県鳥栖市は、鳥栖エリア特有の「物流拠点となる企業集積地」「地域プロスポーツチーム」との連携を通じた脱炭素社会の実現を目的とする相互連携協定を締結しました。

本協定は2023年に締結された佐賀県との連携協定を踏まえ、鳥栖市とKMD双方の資源やノウハウを活用して持続可能な先進地域化を目指すものです。今回の協定では、大幅な省エネルギー化を実現する最先端のZEH（ネット・ゼロ・エネルギー・ハウス）とZEB（ネット・ゼロ・エネルギー・ビル）※7の理解促進ならびに導入促進など、脱炭素社会の実現につながる企業の新商品やサービスの実証にも取り組みます。

鳥栖市役所にて相互連携協定を締結
（左から）岸博幸KMD教授、向門慶人市長

三田キャンパス北別館竣工

2025年3月19日、旧逓信省簡易保険局庁舎跡地の再開発プロジェクトの一環として位置付けられている三田キャンパス北別館の竣工式が執り行われました。北別館の外装には、国内最高水準の日射熱除去性能を持つペアガラスを採用しており、高効率の空調機器や、人感・昼光利用センサーによる照明制御などの導入により、高い省エネルギー性能を実現しています。内装には、慶應義塾が所有する学校林の一つである宮城県南三陸町のFSC認証林・志津川山林で伐採された杉材を製材・準不燃処理し、壁材などに利用しています。北別館での木材利用によるCO_2固定量は約14トンに達しており、デザイン上の工夫により、様々なサイズの杉板や端材を無駄なく使用しています。また、籾殻やヒノキの再利用素材、再生木のデッキ、杉の間伐材を粉砕・加工したサインボードを用いるなど、持続可能な社会に資する建築として、SDGsの理念を随所に反映しています。

「志津川山林」の杉を使用したウォールアート

※7 快適な室内環境を実現しながら、建物で消費する年間のエネルギー収支をゼロにすることを目指した建物のことで、ZEHは一般住宅、ZEBはビルや学校、工場など非住宅の建物を対象としています。（参考:東京都産業労働局　https://www.httnavi.metro.tokyo.lg.jp/column12/）

第36回サイエンス・カフェ「日吉の森探検」開催

自然科学研究教育センターは、科学者と一般市民が積極的なコミュニケーションを行い、自然科学に対する相互理解を得ることを目的として、年に1～2回、サイエンス・カフェを開催しています。

2024年7月20日、第36回サイエンス・カフェとして、「日吉の森探検」を開催しました。日吉キャンパスには「日吉の森」と呼ばれる豊かな自然があり、1200種を超える多様な生き物が生息しています。キャンパス内にはコナラやクヌギなどからなる雑木林が広がり、タヌキなどの動物が暮らし、カブトムシなどの昆虫も見られます。また、森には様々な植物やきのこも生育しています。参加者は、日吉キャンパスの地形や歴史、日吉の森の成り立ちや特徴についての解説を聞きながら、日吉の森を散策しました。植物、鳥、昆虫、きのこなど、いろいろな生き物の観察を通して、身近な場所にも豊かな自然環境が残されていること、そして、生き物の不思議な世界が広がっていることを体感しました。

「日吉の森探検」の様子

自然観察会開催

志木高等学校では、地域住民にキャンパスを知っていただく取り組みとして、生徒が担うインストラクターの解説を聞きながらキャンパス内を散策し、生育・棲息する動植物を観察する「自然観察会」を実施しています。インストラクターの生徒は、事前講習会に3回以上出席し、研修修了の認定を受けています。2024年5月25日の第30回には124名、9月21日の第31回には131名が参加し、インストラクターによる動植物の説明を聞きながら、スタンプラリーなどを楽しみました。

インストラクターの説明を聞く参加者

プラスチック製文房具リサイクル活動

中等部は、2023年から「PILOT使用済みペン リサイクルプログラム」（https://pilot-penrecycle.jp/#aboutProgram）に参加しており、毎年11月の展覧会において、不要となったプラスチック製文房具の回収を行っています。2024年5月には、株式会社パイロットコーポレーション（https://www.pilot.co.jp/）による特別授業が実施され、回収したペンの分解、リサイクルボールペンの組み立て、万年筆の仕組みなどを学びました。また、江の島の海岸でマイクロプラスチックやその元となるごみ拾いを行い、海洋プラスチック問題への理解を深めています。

DATA 環境負荷データ

慶應義塾では、環境負荷を軽減し、持続可能なキャンパスづくりを目指して、エネルギー使用量削減対策やごみの分別・資源化を推進しています。

▶ エネルギー使用量削減への取り組み

空調温度設定、照明設備の間引き点灯などのエネルギー消費設備の適正運用を実施するとともに、使用していない部屋の消灯や空調の停止、設備機器類の省エネルギーモードの設定の励行、照明器具のLED化などに取り組んでいます。

▶ プラスチックごみ削減への取り組み

すべてのキャンパス内にウォーターサーバーを設置し、ペットボトルの消費量を減らすことでキャンパスから排出される使い捨てプラスチックごみの削減に取り組んでいます。

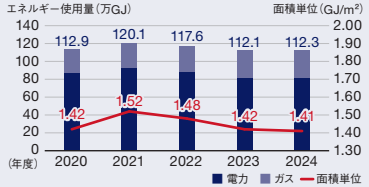
▶ 一般廃棄物の減量・資源化への取り組み

リサイクル可能な紙ごみと可燃ごみの分別を徹底することで、可燃ごみを減らし、環境に配慮したリサイクル実現に取り組んでいます。湘南藤沢キャンパス（SFC）では、分別方法を50音順で簡単に調べられる「ごみ・資源分別辞典」を作成・公開しています。

▶ 水道使用量削減への取り組み

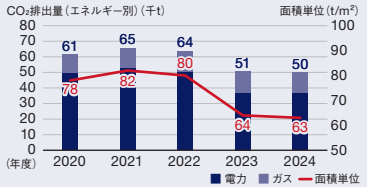
三田、日吉、信濃町キャンパスおよび大学病院では、雨水を処理し、再利用水としてトイレの洗浄水などに使用しています。また、湘南藤沢キャンパス（SFC）では、独立型自家用専用水道「地下水膜ろ過システム」を使用して井水を雑用水および飲料用として、信濃町キャンパスおよび大学病院では、災害用井戸システムを設置して日常的にも井水を雑用水として使用しています。

エネルギー使用量



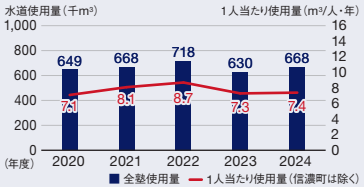
直近一年の変化 | 評価 😐

CO_2排出量



直近一年の変化 | 評価 ☺

水道使用量



直近一年の変化 | 評価 😐

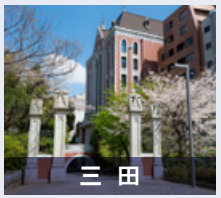
再利用水（雨水）・井水利用量

直近一年の変化 | 評価 ☺

廃棄物発生量と再利用率

直近一年の変化 | 評価 ☺

各キャンパスの環境負荷データ（2024年度）


三田

日吉

信濃町

矢上

湘南藤沢

芝共立

一貫教育校

	三田	日吉	信濃町	矢上	湘南藤沢	芝共立	一貫教育校
CO_2排出量（CO_2-t）	3,318	7,662	25,570	7,661	2,191	1,683	1,948
エネルギー使用量（GJ）	82,721	166,808	557,934	168,516	68,181	36,945	42,299
電気使用量（千kWh）	6,982	13,380	43,518	17,078	5,418	3,557	3,805
ガス使用量（千㎥）	498	1,138	4,043	466	475	138	210
水道使用量（千㎥）	48	132	323	55	45	15	49
廃棄物発生量（t）	188.0	300.3	1,938.4	251.5	193.7	136.1	—
廃棄物再利用率（%）	55.6	51.7	69.1	37.3	19.9	31.2	—

協生環境

協生環境推進室

慶應義塾は、教職員・学生・生徒・児童が、互いの人格を尊重し、多様な価値観を認め協力して生きるための環境の構築と多様性の受容に関する課題に迅速に対処するため、2018年4月1日に「協生環境推進室」を設置しました。また、2019年9月には「慶應義塾協生環境推進憲章」を制定し、「年齢・性別・SOGI（性的指向・性自認）・障害・文化・国籍・人種・信条・ライフスタイルなど、様々な背景を有する人々が、誰一人として社会から孤立したり排除されたりすることなく、互いの尊厳を尊重し合う社会」の実現を宣言し、様々な背景を持つ人々が互いに尊重・協力し合う協生社会の実現を目指しています。この宣言の実現に向け、協生環境推進室では、多様な価値観を共有・発信するプラットフォームを基盤に、慶應義塾がこれまで培ってきた知見を共有しながら、ワーク・ライフ・バランス、バリアフリー、ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン（DEI）の事業推進やこれらの理念を尊重する環境や制度の整備など、一貫教育校から大学・大学院、大学病院までを包含した全塾的な取り組みを推進しています。

「独立自尊」・「他尊」のキャンパスを目指して

〔 私たちが考える協生環境とは 〕

異なる価値観に敬意を払い、互いの尊厳を認め合いながら、
社会的固定観念と心身の制約を乗り越え、
一人ひとりが自分の選択に応じた生き方を実現できる社会

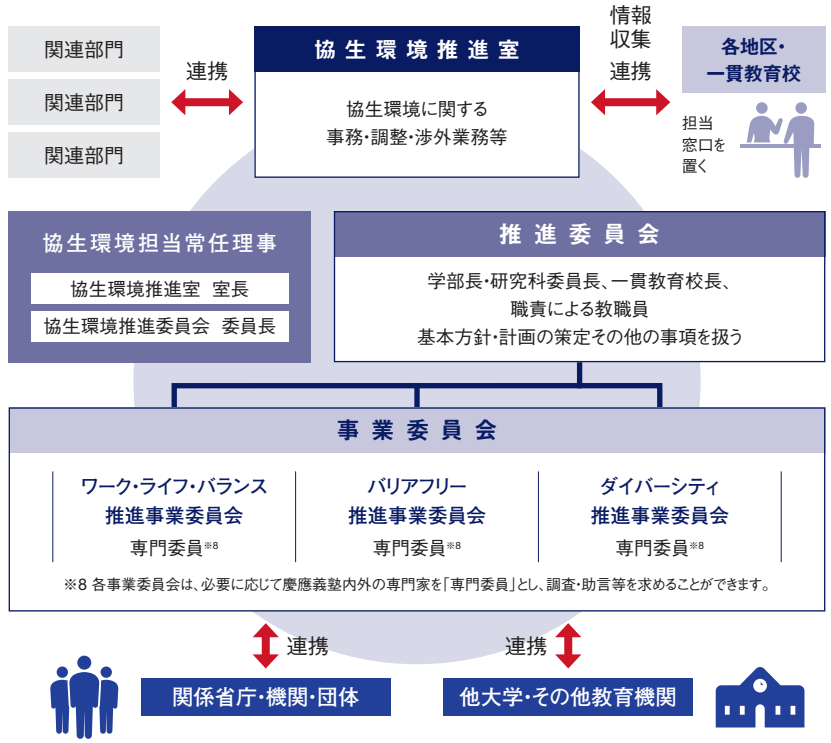
〔 協生環境に込められたメッセージ 〕

異なる価値観への理解、互いの人格を尊重する姿勢、
そして何より自分らしく生きることへの共感と配慮

ダイバーシティを受容・推進できる組織こそ発展・成長できる

体制図

協生環境推進室は、担当常任理事の下に推進委員会を設け、その下で3つの事業委員会が活動を行っています。



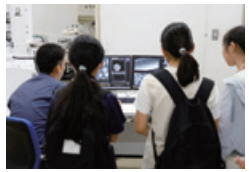
協生環境推進室Webサイト　https://www.diversity.keio.ac.jp/index.html

協生環境の取り組み

全国10万人以上の中高生女子の進路選択を応援! Girls Meet STEM Collegeに参画

理工学部は、公益財団法人山田進太郎D&I財団による、中高生女子向けにSTEM（Science, Technology, Engineering and Mathematics）領域の学生生活が体験できるプログラム「Girls Meet STEM College」に2024年6月より参加しています。

2024年8月30日、「Girls Meet STEM College」の協力を得て、中高生女子を対象にしたイベント“Girls Science Club 2024”を実施しました。実験や最近の研究の紹介のほか、メディアセンター、中央試験所の実験施設および量子コンピューティングセンターを中心に巡るキャンパスツアーと、在学生と教員に大学生活や受験勉強、学門※9の選び方、留学などを自由に相談できる座談会を行いました。


中央試験所の見学

座談会の様子

授乳・搾乳・女性休憩室の整備

慶應義塾では、仕事と生活の調和の環境づくり、CARE（Consultation, Assistance, and Resources for Employees;悩みと仕事の両立支援プログラム）、Breezeプロジェクト（女性のからだ支援プログラム）およびKIDS（Keio Infant Daycare Support;育児支援プログラム）の一環として、各キャンパスにおいて授乳・搾乳を必要とする方、妊娠期・出産後・月経期・女性特有の病気・症状などで一時的な休養を必要とする教職員・学生のための環境整備を進めています。2024年度は新たに日吉キャンパスに同スペースを設置しました。

三田キャンパス休憩室

日吉キャンパス休憩室

※9 「学門」とは、“学びの庭への入口”という意味を込めた言葉です。理工学部では、入試の時点で5つの「学門」（学門A:物理・電気・機械分野、学門B:電気・情報分野、学門C:情報・数学・データサイエンス分野、学門D:機械・システム分野、学門E:化学・生命分野）のいずれかを選択します。

「女性の活躍を聞くシリーズ」講演会開催

経済学部では、専門課程における女性教員比率向上および女子学生比率向上を目的として、2021年秋に経済学部女性教員比率タスクフォースを組成し、講演会の企画などを通じて、協生環境改善の角度から教員の意識向上を図っています。2024年度は、「女性の活躍を聞くシリーズ」と題した講演会を開催しました。

2024年6月17日の第1回講演会「Finland and Equality」では、駐日フィンランド大使館書記官であるニーナ・ヴァイサネン氏を迎え、データを基に、ジェンダー平等先進国であるフィンランドの経験やフィンランド流の価値観、生き方について説明がなされました。また、多様性を重んじた組織、社会を実現していくためのロールモデルの重要性や、ジェンダー平等度が高く、幸福度ランキング、SDGsの達成度などでも常に上位のフィンランドでさえも出生率が1.3と伸び悩んでいる事実など、現在進行形の課題についても話が及びました。2024年12月17日の第2回講演会「意思決定のテーブルにつこう。女性のリーダーシップ論」では、株式会社コトラ代表取締役の大西利佳子氏にご講演いただきました。大西氏は、これまでのキャリアや起業家としての経験を基に、「意思決定」「リーダーシップ」「社会貢献」などについて語られました。本講演会は、学生や社会人にとって、キャリア形成やリーダーシップを発揮するための具体的なヒントを得る貴重な機会となりました。

第1回講演会

第2回講演会

アンコンシャス・バイアス研修会の実施

2024年7月22日と8月2日、塾長・常任理事等の慶應義塾執行部および学部長・研究科委員長・一貫教育校長・関係部門長等の協生環境推進室推進委員を対象に、第2回アンコンシャス・バイアス研修会（＝無意識の偏見をなくすための研修会）を実施しました。今回は、大空裕康弁護士（大空・山村法律事務所、第一東京弁護士会所属）を講師に迎え、無意識の言動などからハラスメントや訴訟の事案になってしまった具体的な事例を用いながら、どのようなことに気を配ることが必要かなどについて学びました。

アンコンシャス・バイアス研修会の様子

協生環境の取り組み

AHEAD JAPAN主催の障害学生支援セミナーや全国大会を開催

2024年6月29日、三田キャンパスにて、一般社団法人全国高等教育障害学生支援協議会（AHEAD JAPAN）と協生環境推進室共催による障害学生支援セミナー「私立大学における体制整備―改正障害者差別解消法の施行をふまえて」を開催しました。2024年4月に施行した改正障害者差別解消法により、これまで私立大学等では努力義務であった合理的配慮の提供が法的義務になりました。さらに、文部科学省の「障害のある学生の修学支援に関する検討会報告（第三次まとめ）」が公表され、これらの社会的動向を受けて、私立大学においても障害学生支援の体制整備を一層進めていく必要性が生じています。セミナーでは、文部科学省からの「第三次まとめ」の内容説明のほか、障害学生支援に携わっている大学教職員等によるパネルディスカッションなどが行われました。

続いて2024年8月29日～8月30日には、三田キャンパスにて「AHEAD JAPAN CONFERENCE 2024（第10回全国大会）」が開催され、全国から多くの参加者が集まり、障害学生支援に関する実践・研究の発表やネットワークづくりが活発に行われました。また、開催前日には、障害学生支援に関わる慶應義塾教職員のための特別企画として、障害学生支援の専門家や文部科学省職員による、障害のある学生への対応などに関する勉強会が開催されました。

AHED JAPAN CONFERENCE 2024
慶應義塾のポスター発表の様子

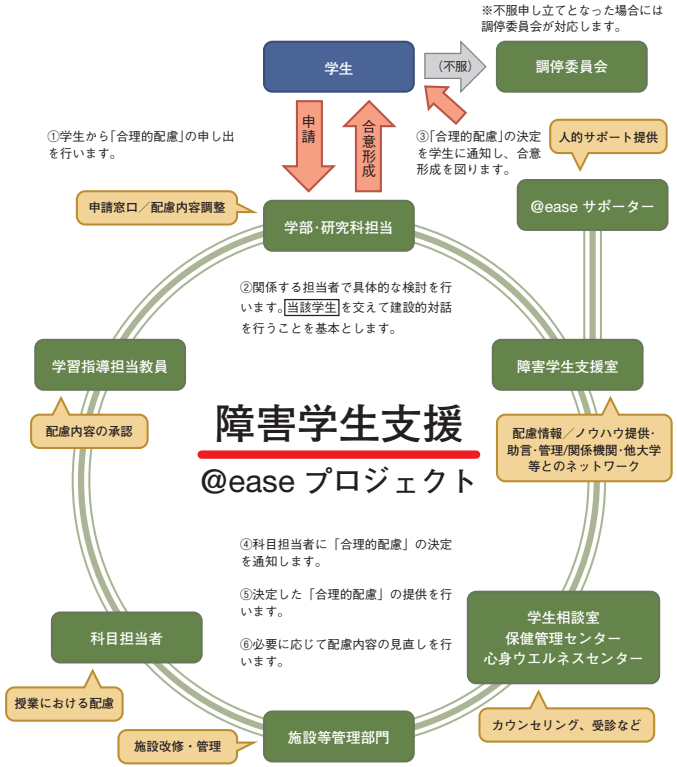
女性のからだ支援～Breezeプロジェクト～生理用品の無償配付

慶應義塾では、女性のからだ支援「Breezeプロジェクト」の一環として、経済状況による生活不安を抱える女子学生を対象に、生理用品の無償配付を実施しています。2024年度は、4月、7月、10月、1月の4回募集を行いました。また、生理用ナプキン無料提供ディスペンサーOiTr（https://www.diversity.keio.ac.jp/breeze/breeze.html）をすべてのキャンパスに導入しています。女子学生の生理に伴う心やからだの負担軽減とジェンダーギャップの是正に寄与し、快適な大学生活を送るための一助となることを目指しています。並行して専門医によるからだセミナーの開催や保健管理センターに「女性のからだ・男性のからだ相談室」を開設しています。

障害のある学生支援体制の整備

慶應義塾では、障害のある学生を支援するために、関係する部門が連携して取り組む「@easeプロジェクト」と名付けた枠組みを用意し、関係部門が連携し、対応を行うための体制整備を進めています。その一環として、2024年度より、在学生向けポータルサイト「K-Support」による「合理的配慮」のオンライン申請を導入しました。これにより、学生は時間や場所に制約されることなく、申請手続きを行うことができるようになりました。

「合理的配慮」申し出の流れ



DATA 女性が占める割合

志願者数
（一般選抜 / 各年度4月1日時点）

直近一年の変化 | 評価

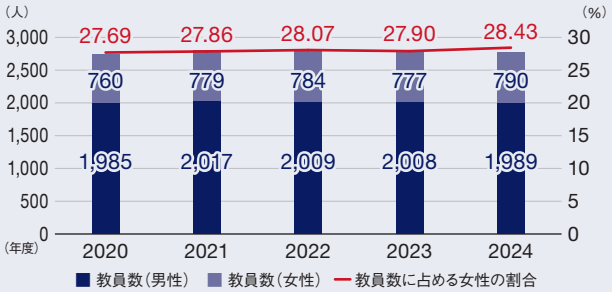
入学許可者数
（一般選抜 / 各年度4月1日時点）

直近一年の変化 | 評価

卒業者数
（全学部 / 各年度実績）

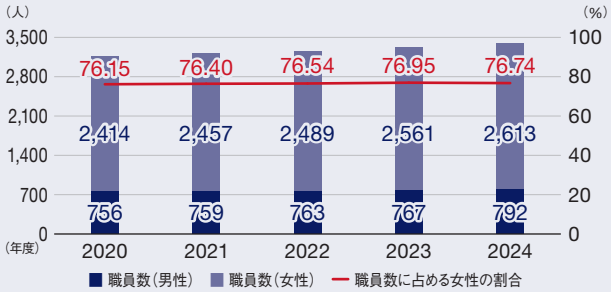
直近一年の変化 | 評価

教員数
（常勤 / 各年度5月1日時点）



直近一年の変化 | 評価

職員数
（常勤 / 各年度5月1日時点）



直近一年の変化 | 評価

健康・福祉の取り組み

小泉信三記念講座※10
「私たちが目指す近未来の医療・介護・ヘルスケアとは」開催

2024年9月13日、中村雅也医学部教授による2024年度小泉信三記念講座「私たちが目指す近未来の医療・介護・ヘルスケアとは」が、信濃町キャンパスにて開催されました。講演では、アカデミアと企業のサイエンスナレッジ・データ基盤を活用して展開される異分野融合研究や、そこで創出される様々なセンシング技術やAI解析によるアルゴリズムなどが紹介されました。医療・介護・ヘルスケアをシームレスに結び、治療後の悩みを抱える個人・家族が必要な時に適切なところにつながり、安心と生きがいを持って自分らしく健康で豊かに過ごせるヘルスコモンズ共生社会の実現を目指したいという内容で、参加者は熱心に聴講し、活発な質疑応答が行われました。

講演する中村教授

公開講座「住友生命が取り組む『ウェルビーイング（＝よりよく生きる）』とは」開催

2024年5月24日、システムデザインマネジメント研究科（SDM）は、公開講座「住友生命が取り組む『ウェルビーイング（＝よりよく生きる）』とは」を開催しました。第1回「ウェルビーイングアワード」（https://www.asahi.com/ads/wellbeing_awards/）でモノ・サービス部門グランプリを受賞した住友生命保険相互会社 高田幸徳取締役代表執行役社長と同アワードで審査委員長を務めた前野隆司SDM教授（ウェルビーイング学会代表理事）の対談、SDM聴講生との議論などのプログラムを軸に、住友生命が健康増進型保険“住友生命「Vitality」”を核として経営の真ん中に「ウェルビーイング」を据える意味と、「ウェルビーイング（＝よりよく生きる）」に関する理解促進を図りました。

※10 小泉信三記念講座は、故小泉信三博士の人と学問を記念して設けられた小泉基金により、全学的な総合講座として1968年より年に数回実施されています。この講座は広く学外の方にも聴講料無料で公開されており、原則として特に予約なく自由に参加いただけます。

市民公開講座「がんの基礎から現在のがん治療、そして最新がん治療法の紹介」開催

2025年1月19日～1月26日、薬学部は、第3回がんプロフェッショナル研修会市民公開講座「がんの基礎から現在のがん治療、そして最新がん治療法の紹介」をオンデマンド配信にて開催しました。がんは日本人の2人に1人が罹患する国民病であり、2000年代から分子レベルでの研究が進み、様々な新薬が開発されています。特に、免疫チェックポイント阻害薬に代表されるがん免疫治療法は、手術・化学療法・放射線治療に続く第4のがん治療として大きな期待を集めています。講演では、免疫チェックポイント阻害薬を中心とした次世代がん治療法の現状と今後の展望について、最新の研究報告を交えて解説しました。

薬学部生考案の健康応援メニューを港区役所食堂にて提供

薬学部薬科学科1年生の授業「早期体験学習・アントレプレナーシップ導入講義」で考案したメニューが、2024年9月17日～9月20日と9月24日～9月27日、一般の方も利用可能な港区役所職員食堂「レストラン・ポート」（https://www.city.minato.tokyo.jp/gomigenryou/tabekiri/0062minatokuyakushoshokuinnshokudourestaurantpo-to.html）にて提供されました。学生たちは、港区役所職員の健康診断データの分析、ペルソナ設定、文献調査、専門家へのヒアリングからメニュー開発までを実施し、メニュー内容の監修は、港区健康推進課の管理栄養士の方にアドバイスをいただきました。野菜、きのこ、海藻類をふんだんに使用し、健康的かつ満足感を得られるよう工夫を凝らした、糖尿病対策メニュー「血糖値ガパオ」とメタボ対策メニュー「食物繊維たっぷりがっつり定食」の2種類が提供されました。

糖尿病対策メニュー「血糖値ガパオ」

メタボ対策メニュー「食物繊維たっぷりがっつり定食」

健康・福祉の取り組み

RENKEI※11 ヘルス・ワークショップ主催

2024年12月1日～12月3日、鶴岡タウンキャンパスにて、RENKEIヘルス・ワークショップを主催し、日英両国のRENKEI加盟大学から40名以上が参加しました。3日間にわたるワークショップでは、健康寿命を延ばし、健康社会を実現する上での課題解決に向けて、食事・生活習慣・テクノロジー・地域医療について、活発に議論されました。慶應義塾からは、土屋大洋常任理事、荒川和晴政策・メディア研究科教授（先端生命科学研究所所長）、新井康通看護医療学部教授（百寿総合研究センター所長）ら9名の研究者が参加し、先端生命科学研究所の研究成果から誕生した大学発ベンチャーの活動や100歳以上の方々の長寿の秘訣を医学的に明らかにする研究などが紹介されました。

RENKEIヘルス・ワークショップ参加者

慶應義塾大学日吉子ども食堂開催

2024年6月22日、10月5日、12月21日に慶應義塾大学日吉子ども食堂を開催しました。本企画は日吉キャンパスにおける様々な社会貢献に関わるプロジェクトの中の、地域との交流実現に向けた取り組みの一つとして、2022年12月より実施されているものです。公認学生団体である「スローフードクラブ」に所属する学生が中心となって、慶應義塾におけるSDGs達成や地域と大学の関わりを深めるための取り組みの一つとして具現化し、日吉キャンパスの学生食堂「グリーンズマルシェ」の協力の下、日吉キャンパス教職員と共に企画・運営しています。

7回目となる2024年12月21日の子ども食堂には、日吉キャンパス周辺にある小学校4校から約30名の小学生が参加しました。「慶應の学生と交流しよう!」と題して、参加者と大学生が一緒にクイズや工作、食事を楽しみながら、交流を深めました。

第7回日吉子ども食堂の様子

※11 日本と英国の大学が、双方のナレッジの共有や国際共同研究を円滑に創出するためのパートナーシップです。加盟大学は、慶應義塾大学、九州大学、上智大学、東北大学、立命館大学、サウサンプトン大学、ダラム大学、ニューカッスル大学、リーズ大学、リバプール大学。（2025年4月現在）（https://www.britishcouncil.jp/programmes/higher-education/university-industry-partnership/renkei/about）

ワークショップ「最先端の医療機器でリアルな医療体験を!」開催

2024年8月17日、麻布台ヒルズの予防医療センターで、中学生を対象としたワークショップ「最先端の医療機器でリアルな医療体験を!」の第1回が開催されました。このワークショップは、麻布台ヒルズのテナント企業や店舗などが子どもたちに学びの場を提供するサマープログラム「ヒルズ・ワークショップ フォー・キッズ2024」の一環として、慶應義塾が本物の医療機器に触れる体験学習の機会を提供したものです。参加した中学生たちは3グループに分かれ、予防医療センターの医師・看護師・技師と、医学部・看護医療学部・薬学部生の救命救急措置法普及活動サークル「KAPPA（Keio ACLS Popularizing and Promoting Association）」所属学生の指導で、内視鏡で胃の中を調べるトレーニング、腹部超音波検査装置による内臓の様子の観察、シミュレーターとAEDを使った一次救命処置の3つを、ローテーションしながら学んでいきました。

予防医療センターでは、さらにプログラムを改良しながらこの取り組みを続け、子どもたちに最新の医療に触れる機会を提供していきます。

AEDを使った一次救命処置の実践

「多分野の協働で実現する身体活動促進シンポジウム2025」開催

2025年3月4日、KGRI慶應スポーツSDGsセンター、東京大学大学院医学系研究科保健社会行動学分野および日本運動疫学会共催による「多分野の協働で実現する身体活動促進シンポジウム2025～スポーツ推進計画と健康増進計画を同時に推進・達成するための自治体戦略～」を東京大学本郷キャンパスにて開催しました。住民の身体活動促進やスポーツ実施率向上を多分野・部署間の協働で実現し、スポーツ推進計画や健康増進計画等を効果的に推進するための実践的な知識や課題を共有することを目的とし、自治体におけるGood Practiceや課題を共有しました。

シンポジウムポスター

塾生会議

塾生会議

「塾生会議」は、フランスやイギリスで行われている気候変動対策や温室効果ガス削減対策を国民の側から提言する会議にヒントを得て、慶應義塾SDGsの一環として、学生の意見を本学のSDGsの取り組みに反映させるために発足しました。

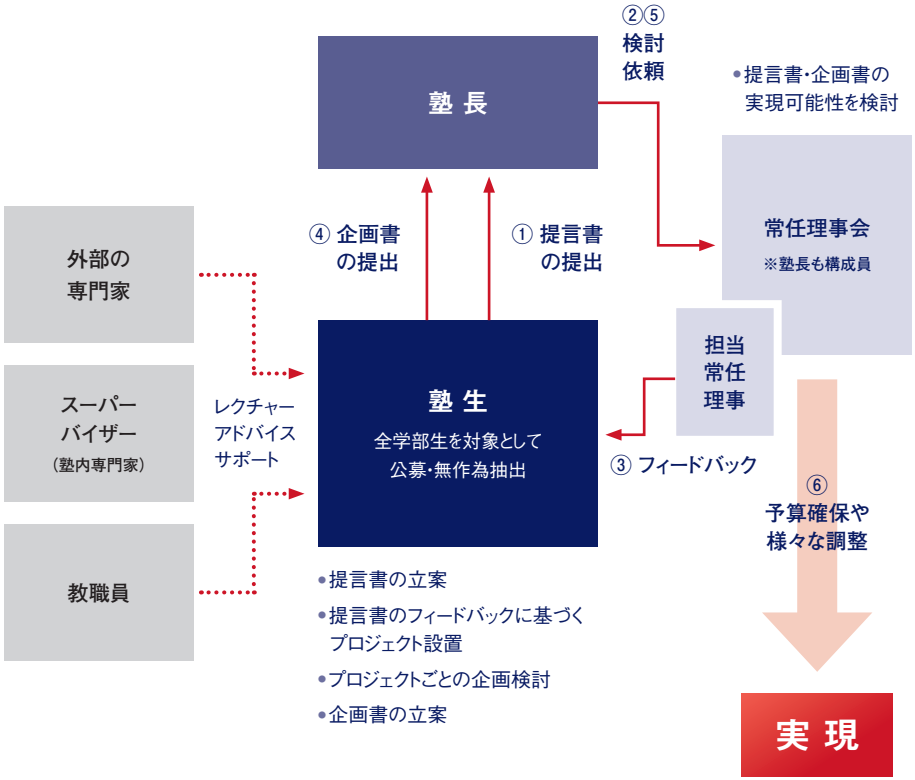
大学の全学部から公募と無作為抽出で選抜された学生が、専門家のアドバイスを受けながらディスカッションを重ね、SDGsを実現するための慶應義塾のヴィジョン・目標・ターゲットを提言することを目的として、2022年6月から活動を開始しています。

夏には、塾生会議のメンバーに加え、慶應義塾の一貫教育校の児童・生徒、メンバー以外の大学生の希望者の総勢約100名が参加する「慶應義塾SDGs会議ーサマー・キャンプー」を開催し、年齢を超えてSDGsについて議論しています。

塾生会議が1年間の活動を通じて取りまとめた17のゴールを踏まえた提言は、最終提言発表会で塾長に直接提出され、塾長と参加学生の間でさらに踏み込んだ意見交換が行われます。提出された提言については、塾長を中心に検討・議論され、慶應義塾の取り組みや次年度の塾生会議の活動につなげられています。

グループワークを行う塾生会議のメンバー

体制図



塾生会議プロジェクトの活動

塾生会議の提言を踏まえて提出された企画は、学内の審査委員会で審議され、採択されたものがプロジェクトとして稼働します。2024年度の各プロジェクトの活動内容を紹介します。

サスシープロジェクト

SDGsゴール14「海の豊かさを守ろう」における10のターゲット内容や具体的な取り組みの認知向上、サステナブル・シーフードへの興味関心のきっかけとなることを目的としたプロジェクトです。

2024年4月23日～4月25日と12月17日～12月19日、日吉キャンパスの学生食堂「グリーンズマルシェ」で、株式会社グリーンハウス（https://www.greenhouse.co.jp/）の全面協力の下、ASC/MSC認証を取得しているシーフード（サステナブル・シーフード）を使用したメニューを提供する、「サステナブル・シーフードウィーク」を開催しました。

2025年度以降は協生環境推進室管轄の事業として、定期的なサステナブル・シーフードの提供を継続していきます。

MSCおさかなミンチの麻婆丼

みんなで子育てプロジェクト

学生の子育てに対する不安解消や、子育てを視野に入れたキャリアプラン形成を後押しし、日本では依然として問題となっている、育児による離職率の高さの解消を目指すプロジェクトです。

2025年2月26日、日吉キャンパスにて、パネルディスカッションイベント「人生の先輩に聞いてみよう　教えて!子育てとキャリアのこと」を開催し、5名の登壇者より、育児と仕事を両立する上での悩みや職場・家庭での取り組みで良かったことなど、将来に向けてのアドバイスを受けました。また、2025年3月、実際に子育てを体験する試みとして、ベネッセ日吉保育園（https://hoiku.benesse-style-care.co.jp/facilities/area_kanagawa/yokohama/h-hiyoshi/）での全3回の保育体験を企画し、学生11名が参加しました。

パネルディスカッションの様子

ウォーターサーバープロジェクト

全キャンパスに設置された46台のウォーターサーバーの認知度・使用率を上げるため、2024年5月～6月に各キャンパスにおいて麦わらを配合したボトルの無料配布と、景品が当たるスタンプラリーを実施しました。

今後は、設置・管理を担う管財部や協生環境推進室と共に、利用のさらなる定着のため、公式SNSや大学の広報を活用した情報発信の強化や、設置場所ごとの利用率を分析し、より多くの人にとって便利な場所への再配置や追加設置などを検討していきます。

麦わら配合ボトルの無料配布

慶應生と日吉の街の交流プロジェクト

SDGsゴール11「住み続けられるまちづくりを」の実現のため、慶應義塾が地域社会で果たすべき役割を学生と地域住民の交流を通じて考えながら、「近くて遠い慶應義塾大学」から「街の誇りの慶應義塾大学」へと変革していくことを目指すプロジェクトです。日吉に住む小学生に焦点を当て、学生がキャンパス近隣地域の小学校や放課後キッズクラブを訪問し、本をテーマにしたワークショップを行うことで、慶應義塾も本も、より身近に感じてもらうことを目指す「大学生ブックキャラバン～本とゲームで楽しもう!～」と塾生会議×師岡小プロジェクト「探求活動―師岡小版SDGsを実践しよう!―」を実施しました。

2024年8月に横浜市立日吉台小学校放課後キッズクラブ（小学校1～4年生対象）、2025年1月に川崎市立木月小学校（小学校3年生対象）で「大学生ブックキャラバン」を実施し、SDGsに関する本の読み聞かせを通して日常生活で実践できるSDGsについて考え、SDGs宣言を行いました。また、2024年5月～12月、「師岡小学校版SDGsを実践しよう!」をテーマに、慶應義塾でのSDGsの取り組みを紹介しながら横浜市立師岡小学校でできることを考え、イルミネーション・カルタ・ポスターの3班に分かれて作品の作成・展示を行いました。

今後も、キャンパス周辺の小学校に活動をさらに展開していく予定です。

SDGs宣言作成の様子

SDGsカルタ

塾生会議プロジェクトの活動

地方学生プロジェクト

SDGsゴール10「人や国の不平等をなくそう」の実現のため、「地方」に焦点を当てたプロジェクトです。地方出身生の割合を増やし、学生の多様化を推進することで学内の交流を活性化させ、社会課題解決につながるアイデアを生み出すことを目指し、「2030年までに地方出身生の割合を40%までに復活させる」ことを掲げ、入学センターと連携し、入学時や大学生活の不安を解消するソフト面の支援強化を行っています。

2024年4月2日～4月5日と5月7日～5月10日、日吉キャンパスの学生食堂「グリーンズマルシェ」と湘南藤沢キャンパス（SFC）の食堂「タブリエ」において、地方出身生やひとり暮らしの新入生、留学生等を対象に、それぞれの地元の食文化についての交流を深めながら、健康的な自炊の重要性やコツを学ぶ「よる食堂」イベントを開催しました。イベントでは栄養に関するレクチャーや交流企画などに加えて夕食も無料で提供され、多くの学生が参加し、盛況を収めました。また、地方出身生やひとり暮らしの学生がより充実した大学生活を送れるように支援するため、2024年5月、デジタルパンフレット「Unlimited Vol.2」を作成しました。健康管理や精神的なサポート、交友関係の構築などのソフト面での支援に重点を置いており、奨学金や住居支援、健康管理、履修登録のアドバイスなどの情報をまとめています。

よる食堂イベントの様子

Unlimited Vol.2

キャンパスの省エネ化プロジェクト

塾生会議の認知度を上げるため、太陽光パネルを使用し、再生可能エネルギーを100%利用した「電気代0円のイルミネーション」を、2024年12月16日に日吉キャンパスと湘南藤沢キャンパス（SFC）に設置しました。2024年5月に行ったアンケート調査で、塾生会議が実施しているSDGs達成を目指した様々な企画の認知度が低いことが判明し、話題性に富み、視覚的にも目立つ企画として実施しました。日吉キャンパスでは、「慶應生と日吉の街の交流プロジェクト」で師岡小学校の児童が作成したイルミネーションも展示されました。SFC公式のXやインスタグラムでも取り上げられ、注目度の高いイベントとなりました。

日吉パビリオン※12に飾られたイルミネーション

※12 学生間の交流やインフォーマル教育の促進を目的に、日吉キャンパス敷地内に学生の参加型施工により建設された木造パビリオンです。

ごみ箱改革プロジェクト

「『ごみ箱改革』を起点に『持続可能な慶應義塾』を実現する」ことを目指し、「2050年までに慶應義塾のリサイクル率を100%にする」すなわち「ごみ箱の異物混入率を0%にし、ごみを資源として100%活用することで、慶應義塾内で資源の循環を達成する」をゴールに掲げているプロジェクトです。

2025年1月、可燃ごみとして捨てられていた割り箸を資源として回収すると同時に、可燃ごみの削減につなげるため、日吉キャンパスの学生食堂「グリーンズマルシェ」に使用済み割り箸の回収ボックスを設置しました。回収した割り箸は、段ボールに詰めて一般社団法人日本の森林のみらい（https://japan-forest.com/）に郵送し、割り箸リサイクルプロジェクトによって、紙として生まれ変わります。2025年1月14日～2月20日の期間で、約7400本（3700膳）を回収することができました。また、塾生会議×師岡小プロジェクト「探求活動―師岡小版SDGsを実践しよう!―」とのコラボイベントも実施し、慶應義塾内でのポスター制作事例を基に、SDGsの促進を慶應義塾内で終わらせず地域全体に広げることを目的として、師岡小学校6年生の児童と同じ目線でSDGsのポスター制作を行いました。

割り箸回収を呼び掛けるポスター

回収された割り箸

コンタクトケース回収プロジェクト

SDGsゴール12「つくる責任・つかう責任」とゴール14「海の豊かさを守ろう」を実現し、2030年までにプラスチックごみを20%削減することを目指すプロジェクトです。

独自のアンケート調査から、学生の約60%が使用していると想定されるコンタクトレンズに着目し、2024年12月18日、日吉キャンパスの5ヶ所にコンタクト空ケース回収ボックスを設置し、常時回収を可能にしました。また、2025年1月8日～1月9日、日吉キャンパス塾生会館前で、協賛企業である株式会社シード（https://www.seed.co.jp/）のクーポンや景品を用意したコンタクト空ケース回収イベントを開催し、計2841個を回収しました。

2025年度も管財部や協生環境推進室の支援の下、複数のキャンパスでの常設を予定しています。

コンタクト空ケース回収ボックス（画像左）

Keio SDGs News

2024年

4月
日吉陸上競技場リニューアル記念「Enjoy Sports Day」開催

5月
2024塾生会議ガイダンス実施

6月
第23回「森を愛する人々の集い」講演会開催

7月

8月
新川崎タウンキャンパス「夏休み科学実験教室」開催

「慶應義塾SDGs会議ー2024サマー・キャンプー」開催

志木高等学校 志木の森ツアー（夏）開催

9月

| 4月11日〜4月12日 |

伊藤塾長がU7+アライアンス学長会議に出席、G7首脳会議（サミット）に向けて共同声明を発表

スピーチを行う伊藤塾長

「U7+アライアンス（以下、U7+）」学長会議がイタリア・ミラノのボッコーニ大学で開催され、伊藤塾長は11日のセッション「高等教育へのグローバル・アクセス:Global Access to Higher Education」において、多様な価値観に触れ、仲間と切磋琢磨しながら学び続けることの重要性についてスピーチしました。U7+は、大学との協調の下、高等教育へのアクセスを阻む障壁をなくすことをG7各国政府に求める共同声明をまとめ、2024年のG7サミット議長国であるイタリアのアンナ・マリア・ベルニーニ大学・研究大臣に手交しました。

| 6月12日 |

国際刑事裁判所（ICC）と基本合意書（MoU）を締結

ICCとMoU締結

慶應義塾と国際刑事裁判所（ICC）は、基本合意書（MoU）を締結しました。MoUの締結により、学生のインターン生としての派遣などによる実践的な指導の機会創出、教員の研究・研修上の交流が可能となり、将来的には学生の国際刑事司法や国際機関等での活躍の場の拡大や、国際刑事法、刑事法、国際法、国際政治学・国際関係学やその他の隣接する学問領域における研究上の交流の促進などが期待されます。MoU締結を記念して、「ICCは世界の刑事司法の発展に寄与できるのか—日本は、日本人はどう向き合うべきなのか」と題した赤根智子ICC所長による講演も行われました。

| 6月23日〜6月26日 |

伊藤塾長らがAPRU学長会議、APWiLサミットに参加

登壇する奥田常任理事
写真提供:APRU

ニュージーランド・オークランドで開催されたAPRU（The Association of Pacific Rim Universities:環太平洋大学協会）第28回年次学長会議に、伊藤塾長らが参加し、“Oceans: The World's Challenges Divide Us, the Ocean Currents Connect Us”をテーマに、気候変動や海洋環境・生物多様性保全などについて議論を重ねました。年次学長会議に先がけて開催されたAPWiL（Asia Pacific Women in Leadership）In-Person Summitのパネルディスカッション“The Role of University Leadership in Advancing Gender Equity”に登壇した伊藤塾長は、ジェンダー平等に関する取り組みを紹介し、組織のリーダーが果たすべき役割について議論を交わしました。キーノートセッション“A Conversation on Driving Change Towards Gender Equality”に登壇した奥田常任理事は、社会とともに変化するダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン（DEI）の今後のあり方について意見を交換しました。

| 6月25日 |

東アジア研究所国際公開シンポジウム「自由で平和な朝鮮半島に向けた日米韓協力」開催

シンポジウムの様子

東アジア研究所は、日本、韓国、米国、豪州から専門家を迎え、「自由で平和な朝鮮半島に向けた日米韓協力」と題する国際公開シンポジウムを三田キャンパスで開催しました。「北朝鮮核抑止に向けた日米韓協力」、「新しい統一談論と国際協力」、「北朝鮮の社会、人権の実状と変化の可能性」、「中露朝連携強化への日米韓の対応」の4つのセッションが行われ、朝鮮半島問題の解決のため、政府・民間レベルでの協力の必要性について、活発な意見が交わされました。

Keio SDGs News

10月

薬学部附属薬局主催 無料健康イベント開催
（糖質・脂質測定、口腔内検査、心電図測定）

障害のある塾生のためのキャリアガイダンス開催

11月

大学発ベンチャー企業数（慶應義塾大学）
（2024年10月末日現在）が377企業、
日本国内第3位に（2025年6月経済産業省発表）

12月

日本国内で司法試験
最終合格者数・最終
合格率ともに全国第1位

1月

協生環境推進ウィーク2024

2024塾生会議
最終提言を塾長に提出

2月

「KEIO SPORTS SDGsシンポジウム2025
～スポーツが創る持続可能な社会へ～」開催

3月

志木高等学校
志木の森ツアー（春）開催

| 12月6日 |

成田空港にて地震防災演習を実施

成田国際空港株式会社、日本航空株式会社、慶應義塾大学は、成田空港にて地震防災演習を実施しました。三者が連携しての地震防災演習の実施は初の試みとなります。詳しいシナリオが事前に明かされない「ブラインド訓練」で、成田空港にて震度6強が観測された場合を想定し、空港スタッフによる地震発生時の初動対応や空港利用客の避難誘導、被害状況の確認および迅速な情報連携などを確認しました。防災意識の向上および地震発生時の対応に関して共通認識を持ち、空港利用客を安全に避難誘導する初動の実践を目的としています。訓練の様子を記録・分析し、より効果的な防災計画の作成に活かしていきます。

| 2月11日 |

徳島県海部郡海陽町と地方創生に向けた包括協定を締結

締結式の様子

メディアデザイン研究科（KMD）は、徳島県海陽町とメディア・教育ならびにコミュニケーションデザインの分野で協力し、過疎地域の持続可能な未来の創造を目的とする包括協定を締結しました。本協定は、過疎地域が抱える少子高齢化やコミュニティの希薄化といった課題に対して、海陽町とKMD双方の資源や技術を活用し、地域の活性化および地域課題の解決を図り、海陽町の地方創生を目指すものです。今回の協定では、メディア・教育ならびにコミュニケーションデザインの分野において、「小規模学校の強みを生かした新しい教育の実現」と「過疎地域における住民間交流の促進」に取り組みます。本協定による地域内外とのさらなる連携により、新たなイノベーションの創出が期待されています。

| 3月21日 |

日本赤十字社とボランティア協定締結

慶應義塾と日本赤十字社は、人道的課題に取り組む学生ボランティアの育成および活動等を行うことを目的とした連携協定を締結しました。2025年度には、ボランティア活動を希望する学生の支援を行うための環境・体制整備や日本赤十字社との連携を行っていく予定です。

活動支援の例:

- ボランティアに関する相談
- 慶應義塾が関わるボランティア活動の広報
- 日本赤十字社をはじめとした外部機関が実施するボランティア活動に関する情報提供
- 研修会・セミナーの実施

など

Pickup

| 6月 |

THE Impact Rankings 2024に慶應義塾大学がSDGsゴール16で世界60位にランクイン

国際連合が提唱するSDGsの達成度により社会に対する大学の貢献度（インパクト）を測定することを目的とした世界大学ランキングTHE Impact Rankings 2024において、慶應義塾大学はゴール16「平和と公正をすべての人に」で、世界60位にランクインし、日本の大学では2年連続で1位となりました。6回目となる2024版には、世界125の国や地域から2152機関（大学）が参加しました。

16 平和と公正をすべての人に
平和と公正をすべての人に
60位